

ひとり利用に着目した複合商業施設の屋外空間に関する研究

熊本大学工学部 学生会員 ○島田 夏鈴

熊本大学 正会員 星野 裕司

熊本大学 正会員 増山 晃太

1. はじめに

1-1 背景と目的

元来、日本人は、都市において、家、学校、会社などの小集団の外に出ると、個人は孤立性を高め、ひとり空間を欲するという傾向がある¹⁾。ひとり空間とは、何らかの仕切りによって、ひとりである状態が確保された空間のことを指し、目に見える仕切りと目に見えない仕切りの2種類がある。都市におけるひとり空間の変遷を見てみると、2000年から2010年代にかけて多くのひとり空間が課金空間化され、必ずしも間仕切りを伴う空間ではなくなった。その結果、多くの人は、お金を払うことによって、安心してひとりでいられる空間を購入している。近年、ショッピングモールなどの商業施設内の広場や屋上庭園、再開発事業で設けられた空地など、公共性の高い商業化した事例が見受けられるようになった。また、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、新しい生活様式が導入され、個人単位や、屋外での活動に注目が集まり始めている。

そこで本研究は、都市の新しいひとり空間である公共性の高い商業化した屋外空間を対象とし、ひとり利用実態に対する知見を得ることを目的とする。

1-2 研究対象と方法

本研究では、桜町地区第一種市街地再開発事業として2019年に建設された複合商業施設である、SAKURA MACHI Kumamoto(図-1)の2F南側テラスを対象とする。目的とする階層の選定にあたり、既往研究²⁾より、ひとり利用実態の把握を行った。2F南側テラスは他の階層に比べ、どの時間帯においてもひとり利用の割合が最も高く、常に一定の割合でひとり利用が見られたため、2階南側テラスのみを対象地とした(図-2)。

調査方法は、調査員による滞留者の滞留位置、滞留開始・終了時刻の記録と、調査員の補完的データとしての定点カメラによるビデオ撮影である。調査日は表-1の日程の4日間で行った。調査時間は利用者が多く見られる12:30~16:30とした。その後、観測データから、利用者の滞留行動と、利用者に対する周囲の人的要素の影響に分けて分析を行う。



図-1 SAKURA MACHI Kumamoto



図-2 2F南側テラス座席配置

表-1 調査実施日と天候

調査日	11/29(日)	12/4(金)	12/7(月)	12/19(土)
天候	晴	晴	晴	晴
最高気温	13.6℃	14.3℃	15.7℃	10.7℃
最低気温	4.3℃	3.3℃	3.4℃	2.5℃
湿度	51%	44%	55%	44%
風	3m	2m	2m	4m
不快指数	52	52	56	47

表-2 調査実施日と結果

調査日	11/29(日)	12/4(金)	12/7(月)	12/19(土)	計
利用組数	68	45	80	60	253
ひとり利用組数	34	39	62	41	176
複数人利用組数	34	6	18	19	77
ひとり利用率	50.0	86.7	77.5	68.3	69.6

2. 利用実態

4日間の調査で得られた利用組数は表-2の通りである。1人で利用している場合をひとり利用、2人以上で利用している場合を1組としてカウントした。昨年度と今年度の調査結果を比べたところ、大きなデータ数の違いが見られなかったため、対象地の利用者には、新型コロナウイルスによる影響はほぼ見られないと言える。全日程を通したひとり利用は176人で、全体的に見ると、ひとり利用率は69.6%であった。

表-3 男女別利用人数

		総利用人数	計	ひとり利用人数	計
11/29(日)	男性	41	107	18	34
	女性	66		16	
12/4(金)	男性	21	52	17	39
	女性	31		22	
12/7(月)	男性	33	101	20	62
	女性	68		42	
12/19(土)	男性	25	82	13	38
	女性	57		25	

2-1 利用者属性

2-1-1 性別

4日間の2F南側テラスの総利用人数と総ひとり利用人数、また、男女別の人数は表-3の通りである。全日程において、男性の利用数に比べて女性の利用が多かった。男女の傾向を見てみると、女性は比較的多数人利用で訪れる場合が多く、男性はひとり利用で訪れる場合が多いという傾向が見られた。

2-1-2 年代

利用者の年代を把握するために、子ども(12歳以下)、中高生(13~18歳)、青年層(19~30歳)、子育て層(31~45歳)、中年層(45~64歳)、高齢者(65歳以上)の6段階に分けて記録を行った。その結果、全日程において、青年層(19~30歳)の利用が多く見られた。平日の主なテラス利用者は青年層~中年層が占めており、休日には青年層~中年層に加え、中高生の利用も平日に比べ多くなる。しかし、平日休日ともに中高生のひとり利用の割合は少ない(表-4)。

2-2 アクティビティ

観察されたアクティビティをまとめると、全時間帯において、飲食を伴う利用が最も多く見られた。ひとり利用に着目した場合、スマホを見る、新聞を読む、パソコンを用いて作業をするなど、メディアを用い、見えない仕切りを形成したひとり利用が数多く見られた。

2-3 座席占有状況

座席番号①~⑰の各座席において、11/29の座席の占有状況を表したものが以下の図である(図-3)。青色がひとり利用、オレンジ色が複数人利用、緑色が複数席にまたがった複数席における利用を表している。図-3より、①、⑤、⑰のように利用されやすい座席と、⑦、⑩、⑪、⑭のように利用されにくい座席が存在することが見てとれる。この結果より、カウンターの端の座席には利用者が座りやすく、反

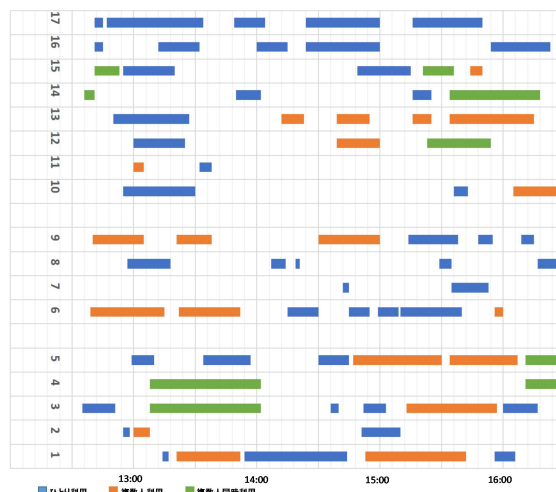


図-3 座席占有状況(11/29)

対に、カウンターの中央部の座席には利用者が座りにくいという傾向が明らかになった。また、カウンターの端や中央といった座席配置の他に、建物の外の風景が見える、見えないといった、座った際の景色が影響していると考えられる。この結果を受けて、ひとり利用の場合と複数人利用の場合に分けて、今後詳しく利用傾向の分析を進める。また、各座席に着目し、座席それぞれの傾向の考察を進めていく。

3. 周囲の人的要素による影響

2章で明らかにした利用実態について、周囲の人的要素がもたらす影響について考察を行う。既に利用者がある場合、新たな利用者はどれほどの対人距離を取ろうとするのか、といった、ひとり利用の際の対人距離の分析など、各座席の間隔や、周囲の座席の占有状況、通行人の数から分析を進める。

4. おわりに

本稿では、SAKURA MACHI Kumamoto の2F南側テラスにおけるひとり利用実態を明らかにした。今後は、調査結果を踏まえ、ひとり利用に対する周囲の人的要素の影響について考察を進めていく。利用実態と周囲の人的要素の2つの側面から分析を進めることで、公共性の高い商業化した屋外空間という、都市の中での新しいひとり利用の形を考察を行う。

【参考文献】

- 1) 南後由和：ひとり空間の都市論，ちくま新書，2018.1
- 2) 阿南陸：連続した外部空間における周回観察調査を用いた利用者行動分析，都市計画論文集，Vol.55 No.3, 2020.10
- 3) 篠崎高志：都市の屋外公共空間における滞留行動に対する人的要素の影響に関する研究，ランドスケープ研究 日本造園研究誌 65(5), 701-706, 2002

表-4 年代別利用人数

	11/29(日)		12/4(金)		12/7(月)		12/19(土)	
	総利用人数	ひとり利用人数	総利用人数	ひとり利用人数	総利用人数	ひとり利用人数	総利用人数	ひとり利用人数
子ども	3	0	0	0	0	0	3	0
中高生	31	2	4	2	15	1	15	3
青年層	40	16	18	14	32	20	31	23
子育て層	16	7	14	9	33	25	20	6
中年層	9	5	10	10	14	12	10	3
高齢者	8	4	6	4	7	4	3	3